

## - 1 まちのつながり

まちとは「つながり」、すなわち風景の、ひとつのありようである。

### - 1 - 1 狭い道で広いつながり 愛知県犬山市

犬山市は市民活動が狭い道を守ったまちとして有名である。また、市民活動継続のためにその後いくつかの市民活動拠点をつくったことも知られている。

名鉄犬山線犬山駅の北方を東西に走る余坂本通りを西へ進むと、道路が屈折する地点の右側に「余遊亭」が見えてくる。これが市民活動拠点のひとつであり、2002年に開館している。その先の新町の道路を西へ進み、途中で左折して鍛冶屋や練屋町などの修景された道を見物しながら駅前通りまで南下し、駅前通りを右折すると、真野邸という大きな建物のある本町交差点に至る。そこを右折すると、犬山城に向かって北上する中本町通りになる。中本町通りは途中から本町通りと名前を変える。

本町通りは犬山城へと続くが、この歴史的なまちなみを持つ通りを拡幅する都市計画がかつてあった。その都市計画は本町通線（県道）

と新町線（市道）とをあわせて拡幅するものであったが、市民を中心とする粘り強い活動により撤回され、貴重な歴史的まちなみが保全されたのである（この経緯に関しては犬山市都市整備部（監修）・高野史枝（取材・構成）『よみがえれ城下町』参照）。

この活動は極めて高く評価され、犬山市のまちづくりは第1回「まち交大賞」の計画大賞（国土交通大臣賞）を受賞した。全国のモデルとして特に優れていると認められたわけである。受賞の際の説明は「市民が歴史的なまちなみの保全など熱心に活動しており、町割りを残すために都市計画道路を廃止したり、道路の美装化や町家の改修など、様々なまちづくりを行ってきた」となっているので、市民主体の活動で都市計画道路を廃止したことなどが高く評価されていることになる。

ところで中本町通りに入って少し進んだ右



「余遊亭」 2007年4月撮影（以下同じ）



中本町通りから本町通りを経て犬山城へ

側に「どんでん館」がある。これが2000年に開館したもうひとつの市民活動拠点である。1階は展示ホール（犬山祭で曳かれる山車13両のうち4両が展示されている）、2階は企画・展示室、交流サロン、活動室になっている。

中本町通りから本町通りに入ると左手に「犬山まちづくり株式会社」運営の町家「弐番屋」が見えてくる。そこにミニFM局「まちの放送室」が入っている（愛知北エフエム放送株式会社）。ここではゼネラルマネージャーの人をはじめ数人の人が活動しており、時には道の反対側の縁台に座った市の職員の人と道路越しに大声で世間話をしていたりする。単なる通りがかりの人も世間話のつもりで話に参加して気がつけば、いつのまにか生放送に出演してたりする。「このあたりは界隈が生きていますね」「すぐ井戸端会議が始まりますからね」「郊外の大型店の影響は大きいけれど、まちの人々と語らいながら買い物をするのを好む人が増えているからまだまだ元気ですよ」などという話になり、犬山とは実に界隈が広いところであ

るとの印象を持つ。

さらに北へ進むと道路の右側に「しみんてい」の建物が見えてくる。これがもうひとつの市民活動拠点であり、2001年に開館している。

「しみんてい」には和室とミニ会議室があり、利用は無料である。印刷・コピーもでき、ボランティアに関心のある人や市民活動グループの相談にも乗るといことなので、まちづくりの活動に大いに貢献しているものと思われる。「しみんてい」には「まちの駅いぬやま」の看板もかかっており、トイレ自由、お茶もセルフで自由、散策マップ・観光マップさしあげます、と書かれている。なお、それぞれの市民活動拠点は相互に連携をとった活動も展開しているとのことである。「しみんてい」からさらに北へ進むと、修景された城前広場などを経て緑豊かな犬山城に至る。犬山市総合計画が描くまちの将来像「木曾の流れに古城が映え ふれあい豊かな もりのまち 犬山」とは今の姿でもあることを実感する。



「どんでん館」



「しみんてい」

### - 1 - 2 風景としての町家 京都府京都市（町家の再生）

全国のまちづくりの現場で町家（町屋、長屋などを含む）の意義を見直す動きが広がっている。そしてその意義は、言うまでもなく単なる見た目のカタチにあるわけではない。大きな意義のひとつは、町家が時間的にも空間的にも土地の様々なものを結びつけ、まちの歴史、風土等を体化しているところにある。そしてもうひとつは、上記の結びつきを背景として、町家がひとつひとつのつながりを強化し、まちづくりを活性化させる触媒のような働きをすることである。京町家をめぐる諸活動は、これらの意義を大変よく表している。

京都では多くの草の根的団体により町家の再生が行われてきた。それらの団体は、単なる実務としてではなく、豊かな哲学をもって町家の再生に取り組んできている。例えば「京町家再生研究会」の理事長・大谷孝彦氏は同会ホームページ（2007年7月1日）で、「場所の個性ある文化」と「魅力ある都市」をつくってきたのは「歴史」であり、歴史とは「自然および人工物、それらと人の係わりが積層した時間」で

あるから、「京都を象徴する文化」である「町家という建築」と「町家と共に歩んできた暮らし、職人の技」を再生する「体験」は「京都という都市のアイデンティティの根拠」になるとともに「美しい景観再生を醸成する根源の力」になるとしている。町家というハードとそこにおける生業というソフトとがあいまって都市のアイデンティティ、都市の風景をつくる。

「アイデンティティ」という抽象的な目的は、「景観」ですら一昔前までは軽視されていたことを考えると、一笑に付される可能性があるが、この点に関しては大谷氏は「抽象的と見られる心の世界を現実的なことへと具体化させる意思がなければ、真の景観再生とはなり得ません」と指摘している。「文化が主体性を取り戻すことによって、ようやく私の権利よりも美を尊重する公の権利が優先される社会が成立するのです」。単なる実利レベルからの発想では、真のまちづくりはできないことがわかる。

京都で町家再生に大きな貢献をしてきた団体は数多いが、紙幅の関係でそれらの中の一部



町家倶楽部 2007年4月撮影（以下同じ）



西陣ヒコバエの家（関西木造住文化研究会）



のみを以下に紹介する。

「京町家ネット」:「京町家再生研究会」(1992年設立)及び同会から派生する形で設立された「京町家作事組」(1999年設立)「京町家友の会」(2000年設立)「京町家情報センター」(2002年設立)の4組織のネットワークであり、京町家の調査研究から実際の修繕事業、京町家文化の継承、貸したい人・借りたい人の橋渡しまで幅広い活動を行っている。

「関西木造住文化研究会」(略称 KARTH):1998年に設立された全国規模の組織で、耐火性、耐震性等の面で木造伝統工法の今日的意義を再認識する様々な調査研究、実験、研修等を行っている。

「古材文化の会」:古建築、古材の保存・活用等を目的に1994年に設立された組織で、様々なイベント、講座、支援等を行っている。

「町家倶楽部ネットワーク」:町家の貸し手と借り手とを結ぶ活動を行っていた組織が

発展し、町家の有効活用策等の相談・実践も行う組織として1999年に設立された。2003年には「SOHO支援町家」として「藤森寮」をオープンし(昭和初期の二軒続き町家を改装)、工房、ギャラリー等として現在8テナントが入居している(「町家倶楽部」事務所も設置)。

公開される京町家も多くなり、その空間の豊かさ、今日的意義を再認識するための貴重な場となっている。一方、京都市の施策も充実してきており、2005年9月には「(財)京都市景観・まちづくりセンター」に「京町家まちづくりファンド」が設立された。モデル事業として2006年5月に3件、2007年1月に5件の改修が決定されている。

なお、町家ブームとともに外部資本が入り込んで町家を町家とは言えないほどに大改造し、短期間で放棄してしまうという事例も出てきているとのことである。グローバル経済化の下でまちを守ることの大切さ、難しさが再認識される。



藤森寮



「四条京町家」の中庭

### - 1 - 3 まちの内から外へ 奈良県奈良市（奈良町）

奈良市奈良町は京都に勝るとも劣らないほど中世、近世の面影をよく残すまちである。そのまちのつくられ方に関して岩崎弘氏が実に興味深いことを指摘している（報告会『「まちの遺伝子」～私たちはまちに何をのこすのか～私たちはまちに何を望むのか』2000年3月、奈良町物語館）より）。氏によれば、奈良町によく残された「小さな空間」とは「個人的であり想像的であり、静肅であり、詩的であり、人間的である」が、大都市の雑踏は「匿名的であり、喧騒であり、非人間的」である。前者は「いわゆる都市計画のマスタープランや建築法規の規制によってできた街」ではなく、「永遠にわたる不文律の掟」で「自然発生的」にできたまちであり、そこでは「都市計画には見られない人間の知恵が、共同防衛という連帯意識の枠の中で美しく結晶している」のである。このようなまちを氏は「内的秩序」のまちと呼び、「都市のインフラストラクチャーをつくり外側から計画的につくっていった」まちを「外的秩序」のまちと呼ぶ。現代の我々が奈良町のまちづく

りから学ぶべきは、この「内的秩序」ということになる。

ということでさっそく奈良町に出かけ、まちの中心よりやや西寄りにある「なら工芸館」をはじめに訪れる。これは2000年に開館した町家風の外観を持つ2階建・鉄骨造の建物で、工芸品の作品展示（工芸家だけでなく個人・グループも可）を行うとともに、奈良工芸後継者育成のための研修も行う施設である。そこに展示されている工芸品は大変素晴らしいが、同館パンフレットの説明も素晴らしい。なら工芸館の基本理念は「受け継ぐ、創作する、開放する」となっている。これは、来るべき「まちづくりの理念」そのものでもあろう。

次いで脇戸町の細い道に入り、「奈良市史料保存館」、「あしびの郷」等を見学しながら真直ぐ南下して「奈良市音声館」に至る。この間、自動車が来ることを除けば実に気持ちのいいまちである。同館は「歌声による人づくり、街づくり」を目指して1994年に開館した。素晴らしいの一言に尽きる。



「なら工芸館」



「奈良市音声館」

2007年4月撮影（以下同じ）

それから更に南下して聖光寺、安曇寺などの寺を眺めながら称念寺のある角を左折し、次いで高林寺のある角をまた左折すると「ならまち格子の家」に着く。奈良町の伝統的な町家を再現して奈良町の「ポイントスペース」となるよう奈良市が整備したものであるが、そのパンフレットの説明がまた大変印象的である。「格子」は「昼間は、外から家の中を見えなくする目隠しの役を果たすと同時に、中からは外がよく見えるハーフ・ミラーのような効果」を持つ一方、「音や風はよく通し」、「表の道で遊んでいる子供たちに格子ごしに気を配ることもでき」、「祭の時や、火事の際は即座に全部とり払うことができ」る。「手入れも大変ですがいろいろな長所や、それをつくることにかけての職人の労力を考えると、日本の建物のファサード（正面）の歴史の中で、町家の格子はひとつの頂点となすものだと考えざるを得ません」。日本のまちの風景は、まちの細部とともに、また、目に見えない人々のつながりとともに、考えなければならない。



ならまち格子の家

さらに北上して突き当りを左へ曲がると、左手に「奈良町物語館」が見えてくる。ここは奈良のまちづくりの中心組織である「奈良まちづくりセンター」(NMC、1984年発足)の活動拠点である。NMCの前身は「奈良地域社会研究会」(奈地研)であるが、同会は奈良町の真ん中を東西に分断する都市計画道路が1970年代に示されたことに危機感を抱いて1979年に発足した。そして様々な調査・提言活動を展開して奈良市に訴えかけ、奈良市がそれを受けてまちなみを守る計画を作成した。そして上記の様々な施設も整備した。その後、奈良町では行政、民間それぞれのサイドで様々な施設が整備されることとなった。「奈良町物語館」が開館にこぎつけるまでには物語があったが、それについてはぜひNMCのHPで確認されたい。

奈良町では集客施設を少数の巨大なハコモノに閉じ込めず、行政、民間それぞれが小さな博物館等をまちの中にたくさんつくって人々の回遊、交流を促している。「内的秩序」のまちづくりの大きな特徴である。



奈良町物語館



## - 2 水は流れる

みずべの見直しがまちなみづくりと共振する。

### - 2 - 1 水辺とまちなみ 千葉県香取市（旧佐原市）

利根川の舟運で栄え「水郷の町」として知られる佐原のまちの再生は、まちの象徴である小野川（利根川の支流）の周辺から始まった。JR佐原駅を南口に降り駅前から南西方向にのびる道路を行くと、間もなく諏訪神社の大鳥居に出る。左折して国道 55 号に入り緩やかに湾曲する道なりに進むと、やがて香取街道に突き当たる。左折して香取街道を進むと蔵造りなどが立ち並ぶ伝統的なまちなみになり、活気も感じられるようになる。程なく道路は小野川と交差し、美しい水面を眺めながら忠敬橋を渡ってさらに進むと三菱館と佐原町並み交流館とが見えてくる。これらの地区が佐原のまち再生の主舞台である。

佐原市では 1973 年に伝統的建造物群保存地区調査が行われ、1981 年にも保存運動が起きたが、どちらも本格的なまちなみ保存活動には至らなかった。そして 1988 年に竹下内閣の「ふ

るさと創生」を契機に三度目の挑戦が行われることとなり、1990 年に国土庁から派遣された 3 名の地域振興アドバイザーと地域住民代表との語らいの中からまちなみ保存の機運が高まり、1991 年 1 月に地域住民代表により「佐原の町並みを考える会」が発足した。同会の名称からもうかがえるように、会の方針はいきなり「保存」を打ち出すものではなく、住民と広く話し合いながら方向を見定めていこうというものであった。会の組織も上下のないフラットなもので、あえて会長も置かなかった。会の運営費も行政の援助に頼らず自費で賄ったが、『町づくり 10 年のあゆみ』（小野川と佐原の町並みを考える会、2001 年）によれば、「今思えば、この犠牲的精神が会を長く存続させたのかもしれない」ということである。その後、市からの援助も受けられるようになり、会の活動は次第に幅広くなっていく。



古い建築が残る佐原のまちなみ  
2007 年 3 月撮影（以下同じ）



再生された小野川

「佐原の町並みを考える会」は手探りで活動を開始し、講演会、フォーラム、勉強会、観光案内等を主に「三菱館」(旧三菱銀行佐原支店)で行った。この建物は市所有の建物(イギリスから輸入された赤レンガを用いて大正3年に建築されたもの)で、当時は市が使わない時間だけ会が借りていた。観光案内所らしくする調度品などは会員の負担により整えたという。

会は1991年7月に「小野川」を付けて「小野川と佐原の町並みを考える会」と改称した。勉強を続ける中で佐原のまちの原点は小野川にあると気付いたからである。小野川の環境整備については1984年から県・市により柳の植栽、擬木柵、街路灯、石畳等の整備が行われてきていたが、会として「護岸等の工事に景観上どうしても承服できない部分」があったため意見を出したところ、以後、工事内容を決める会に呼ばれるようになり、1992年にも県が「コンクリートの今風の橋」を提案したのに対し、会として「復元を基本として景観に合ったもの」を要求した。そして、江戸情緒あふれる風景がもたらされた。佐原では「佐原の大祭」が

年に2回開催されるが(7月の「夏祭り」、10月の「秋祭り」)、その祭の前には同会が主体的に小野川の清掃を行ってきている。2007年も6月28日に会のメンバー、市職員約20名の協働でゴミ拾いや雑草刈りを行った。

まちなみに関しては、会の活動を受けて1994年に市が「佐原市歴史的景観条例」を制定し、会の協力でほとんどの関係世帯から保存の同意を得、1996年に「伝統的建造物群保存地区」を都市計画決定した。そして、同年、文化庁から「重要伝統的建造物群保存地区」に選定された(関東で初)。

同会は2004年にNPO法人化され、活動拠点を2005年に「町並み交流館」に移した。現在は両館の指定管理者になっている。「町並み交流館」は、多目的ホール、レンタサイクルコーナー、地域資源紹介コーナー、研修室等を持ち、観光拠点かつ市民活動拠点となっている。同会は、引き続き小野川やまちなみの保存・活用を通じて「生きている町並み」づくりを目指している。



「町並み交流館」(左)と「三菱館」(右)



「町並み交流館」1階ホール



## - 2 - 2 水辺の美しさと人の心 静岡県三島市

三島は「水の都」と言われる。まちの中心部には源兵衛川をはじめとする幾筋もの水流があり、近年における中心商店街の衰退傾向の中にあってもまちに明るさをもたらしている。三島市は駅近くの水辺にもホテルが舞う環境先進都市であるため、人々の定住志向は強く、人口は増加してきている。

この「水の都」も 1960 年代半ばには危機に直面していた。当時、国は三島市に石油コンビナートを建設する方針を採っていた。その際、「風は滞留せず円滑に流れ問題なし」「どんなに大量に工場において地下水を汲み上げても湧水は減少しない」との説明がなされた。それに対し、専門家の異議、多数の高校生が参加した調査、地元医師の調査研究による「科学的な論拠」の提示があり、市民による反対運動が巻き起こってコンビナート建設は阻止された（渡辺豊博『清流の街がよみがえった』(中央法規、2005 年)）

市民がみずから立ち上がり、みずから調査し、外部からの計画を跳ね返し、流れを守り、まち

を守った。内発型まちづくりの素晴らしい例である。今後のまちづくりにおいて特に参考にし続けるべき貴重な事例であろう。

ところがその三島市においても、水辺の荒廃は進んでしまった。湧水量が激減したことが荒廃の契機となったが、激減した主な原因は上流における産業用水の汲み上げにあったと考えられている。水辺環境の荒廃が進むとともに、生活排水の増加などで水質も著しく悪化していった。そして、価値あるものが汚されると更に芥が投棄され貶められるという人の世の常により、源兵衛川も瞬く間にドブ川になってしまった。美しい風景を守ることの大切さがこの例でもよくわかる。

三島市では荒廃した川を 1990 年代初頭から市民中心の様々な活動により再生させてきた。そして、今では溶岩護岸を用いるなどして生態系に配慮した豊かな水辺空間が回復されている。

水辺再生活動の大きな契機となったのは、1992 年の「グラウンドワーク三島実行委員会」



源兵衛川 2007 年 3 月撮影（以下同じ）



源兵衛川の溶岩護岸

の設立であった。この委員会は、当時市内にあった「三島ゆうすい会」等の市民8団体の仲介型組織として設立されたものであるが、以後同委員会中心に様々なフィールドワークが重ねられ、市民、行政、専門家の協働体制が確立されていった。

「グラウンドワーク三島実行委員会」は1999年に「NPO 法人グラウンドワーク三島」に発展し、活動範囲をさらに拡大してきている。同会の活動を紹介する最近のパンフレットによれば、主な活動場所は「源兵衛川」「宮さんの川・ほたるの里」などの中心部から「境川・清住緑地」「松毛川」などの周辺部まで広範囲なものになっている。「学校ピオトープ」もいくつも整備してきている。また、最近では復活した清流を背景に「環境コミュニティ・ビジネス」も展開している（木・竹製品製作等を行う「せせらぎシニア元気工房」、リサイクル材を用いた「三島うみやあもん屋台」等）。

一方、三島市は「街中がせせらぎ事業」を2001年度から展開している。これは三島商工会議所

が1996年に発表した「21世紀に向けた街づくり“街中がせせらぎビジョン”」がベースになっているが、開始までに3年間かけ100回以上の「市民会議」を開催してコンセンサスを形成した上で実施されているものである。その主な内容は、「街の顔の景観づくり」（駅前広場修景等）、「歩きたくなる道の景観づくり」（鎌倉古道修景等）、「歩きたくなる「案内」づくり」（案内標識整備等）、「小さな博物館づくり」（「三嶋曆師の館」「ほたるの里」等）、「街の水の仕掛け事業」（からくり仕掛け等）となっている。この事業で整備された鎌倉古道は脱色アスファルトと石張りなどで仕上げられており、水辺と調和した景観を形成している。「街中がせせらぎ事業」は徹底した市民協働が大きな特徴となっている。基本計画、実施計画ともに市民主導で作成されており、また、環境美化にはアダプトプログラム等により市民が積極的に貢献している。



源兵衛川と鎌倉古道



宮さんの川（蓮沼川）

### - 2 - 3 すべては生きている 滋賀県近江八幡市

ここにひとつの観光資料がある。その冒頭には、「近江八幡は飲んで騒いで楽しめる観光地ではありません。自然の恵みや先人達が創りだした風景や文化、今現在生活を営む人々が重なり合って醸し出す「風情」が輝く地域です」と記されている。また、資料末尾には、「当観光資料は、市、協会、会員が、近江八幡の魅力を多くの方に伝えようと作成しました。完成までに、多くの時間とお金（1部10円/30万部）をかけた大切な物なので大事に使ってください」と記されている。これらに近江八幡市のまちづくりの精神が見えるように思われる。一方、国土交通省の「まち再生事例データベース」には、「これからのまちづくりの方向を、「資金」から「協働」へ、「金」から「人」へ、「大きい」から「小さい」へ、「速い」から「ゆっくり」へ、と理解するならば、近江八幡市のまちづくりはまことに先進的である」と記されている。まことにその通りであるように思われる。

近江八幡市は「水郷のまち」として有名である。その水郷に関しては、『ピワズ通信』2007

年夏号（発行：水のめぐみ館アクア琵琶、国土交通省琵琶湖河川事務所、水資源機構）が、「自然との共生から生まれ、受け継がれてきた水郷の景観が、これから先も守られ、安らぎを与えつつづけてくれることは、地域はもとより、私たちにとっても大きな喜びといえるでしょう」と讃えている。この水郷を損なうような計画が1972年に発表された。八幡堀の埋め立て計画である。今の価値観からすれば暴挙としか言いようがないが、その計画を阻止するために地元の有志が立ち上がり、周囲の冷たい視線を浴びながらも既に認可を得て工事が開始されていた堀の中へみずから入り、ヘドロまみれになりながら浄化作業を続けた。そして次第に周囲の共感を呼び、協働の輪が広がり、八幡堀はみごとに再生された。また、その市民活動が刺激になってまちなみ保存活動も活発化し、歴史的なまちなみが保全された。以上の経緯に関しては国交省の上記データベースが詳しいのでぜひそちらを参照されたい。

ところで、前頁下の写真には塔が写っている。



八幡堀 2006年2月撮影（以下同じ）



近江八幡市のまちなみ



これは八幡教会の塔である。元の塔は 1924 年にヴォーリズが建築したものであったが焼失してしまい、1983 年に「一粒社ヴォーリズ建築事務所」が建て直している。近江八幡市内を歩いてみれば、あちこちでヴォーリズの建築に出会う。そしてそれらの建築は近江八幡市の古いまちなみに実によくなじんで建っている。ヴォーリズの精神がまちに息づいているかのようである。

ウィリアム・メレル・ヴォーリズ（1941 年に日本国籍を取得し、日本名を一柳米来留と言う）は、英語教師として 1905 年（明治 38 年）に近江八幡に赴任した。周囲の反感のため英語教師は 2 年で辞めてしまったが、その後、近江八幡で建築家、実業家、伝道師等として幅広く活躍した。彼は実業（近江兄弟社）で得た資金をまちの福祉や教育のために使い、結核治療を目的とした病院や図書館、近江兄弟社学園などを設立した（群馬県富岡市のまちづくりを想起するような活動である）。

ヴォーリズは、建築設計者は依頼者の「奉仕

者」となるべきであり、自己の名誉うんぬんは末の末のことである、という趣旨のことを語っていた。そして、焼き損じのレンガでも大切に用いた。建築は自分の表現のためにではなく人々のためにある。そして、この世に無駄な存在はない。豊かな思想の持ち主である。今日の社会では、効率のために人の生き方を規定する、その規定におさまらない者は排除する、という転倒した組織主義的考えが有力になりがちだが、このような転倒した考え方をひっくり返すことは、まちづくりのひとつの大きな使命である。そのようなこともヴォーリズの活動からは感じ取ることができる。

このようなヴォーリズの精神を今日に生かすために、「特定非営利法人ヴォーリズ建築保存再生活動 一粒の会」が 2000 年に発足している（その前身組織は 1997 年発足）。そして、旧八幡郵便局の再生など市民との協働によるまちづくりを行ってきている。この点も上記データベースに詳しい。



ヴォーリズ建築が数多く残る住宅地



旧八幡郵便局

### - 3 ひらくということ

まちづくりで最も大切なものは、金でも物でもなく、人である。

#### - 3 - 1 まちをひらく3つの力 熊本県小国町

小国町のまちづくりの特徴は、3つの力が合わさって大きな力になっているところにある。3つの力とは、内からまちを支える人の心、外から新しい風を入れる交流の力、土地と調和し土地の恵みを生み出す生業の力である。これらは、熊本県旧宮原町（現・氷川町）のまちづくりの尺度である「火の心」、「水の心」、「里山の心」を想起させる。

の力は、組織ではなく個人を大切にすることから生まれる。町長の宮崎暢俊氏は町の広報誌で「地域全体がゆるやかというか、寛容じゃないとダメだよ」と述べているが、これがまちづくりの一番の基礎である。町の「第3次シナリオ」（2001年）では「これからは、組織によって人が動かされるのではなく、人が組織を動かす仕組み」へ転換しなければならないと明示されているが、まさにまちづくりは組織が上から決めるべきものではなく、個人が下から

決めるべきものである。それをシステムとして確保するため、小国町では「総合計画」ではなく「シナリオ」によってまちづくりの方針を決めている。「総合計画」は「事業を羅列する行政計画」になってしまうが、「シナリオ」は「町民と行政が行動をともにするうえでの指針となるような内容や叙述」ができるという判断であり、この両者の違いは「都市計画」と「まちづくり」の違いにも当てはまるものであろう。「シナリオ」は住民の主体的な議論により策定されてきている。

の力は、町の中の各所に見られる特徴的な建築が象徴している。1987年に「ゆうステーション」が完成し、その後も様々な建築が完成したが、それらの建築の契機となったのは、小国杉の産地でありながら林間広場に管理棟をコンクリートブロック造でつくる建築案に宮崎町長が疑問を抱いたことにある。



「ゆうステーション」（1987年完成）  
2006年2月撮影（以下同じ）



「小国ドーム」（1988年完成）

宮崎町長はその設計を変更させるとともに、町に新しいデザインをもたらしてくれる人物を探していた。そしてある建築雑誌で葉祥栄氏の建築写真を目にし、同氏に新たな建築を依頼することとなった。こうして生まれたのが小国杉を用いた木造立体トラスをその特徴とする「ゆうステーション」(1987年完成)、「小国ドーム」(1988年完成)等である。そして若手建築家も葉氏に続いて小国杉を用いた建築に挑戦し、「ぴらみっと」(1988年完成)、「木魂館」(同)、「商工会館」(1989年)、「牛乳処理施設」(1990年完成)などを建築していった。

外からの新しい風を入れ交流の力を生み出すもうひとつの仕組みとして町は「ツーリズム」を推進している。小国町は「木魂館」を拠点施設として1997年に「九州ツーリズム大学」を設立し、毎年9月から3月までの期間で多くの学生を集め、10期までに約1,500人の卒業生(本科生)と修了生(聴講生)を輩出している。その教育の根底には「地域の人づくりには“学習”と“交流”が大切だ」という北里柴三郎(小

国町出身)の言葉がある。

ツーリズムは の力にも通じるものであるが、小国町では の力を高めるために早くから畜産の改革を推進していた。1957年には小国の気候風土に適したジャージー牛を導入し、同年パイロット牧場「三共牧場」を立ち上げた。そして、製品開発(ドリンクヨーグルトなどの様々な乳製品)、供給形態の改善(紙パックの導入)、販路拡張(大都市の大手デパート等)の工夫を重ね、「6次産業化」を推進してきた。牛乳等は地元の学校給食等で広く消費され、一方、ジャージー酪農家で生産される堆肥は地元の農地に還元される。地産地消の循環型産業が実現している。さらに1990年には新しい「牛乳処理所」が完成し、一層の流通円滑化が図られている。酪農製品等は「ゆうステーション」や「ぴらみっと」などで販売され人気商品になっている。生産の場はツーリズムや子供の教育の場にもなっている。小国町では、 、 の力が相互に有機的に結びついている。



「ぴらみっと」(1988年完成)



「牛乳処理所」(1990年完成)



### - 3 - 2 志の再生 愛媛県松山市

松山市のまちづくりの中心テーマは『坂の上の雲』のまちづくりである。それが重視するものは金でも物でもなく、人の精神である。そしてその目的の本質は個人の回復にあると考えられる。それは、このテーマを1999年に提案した中村時広市長が「未来永劫追い求めていくのが『坂の上の雲』。その雲というのは個人個人が持つものであって、大きくてもいいし小さくてもいい、規模の大小や中身ではなく、それぞれが見つけるということが大事なんだ」と述べていることからわかる。とても柔軟な考え方であり、組織の上からの決定ではなく個人を重視する小国町の精神に通じるところがある。松山市の総合計画は「これまでの社会経済システムの限界が見えてきました」「一人ひとりの個性や多様な価値観が重視されるようになり、自立や多様性を尊重する社会へと変化してきました」と述べているが、このような時代であるからこそ『坂の上の雲』の精神を人々が回復することが大切であると言える。

『坂の上の雲』は司馬遼太郎氏が40代のほ

ぼすべてを費やして完成させた小説であり、松山出身の秋山好古・真之兄弟、正岡子規の3人を主人公とするが、これをまちづくりに活かすために松山市は「フィールドミュージアム構想」を掲げた。それは、松山市内に点在する小説ゆかりの地や松山市の地域資源をひとつの作品にたとえ、市内全体を「屋根のない博物館」に見立てるものである。その「博物館」は具体的には松山城周辺の「センターゾーン」、その周辺に位置する「サテライト」(「秋山兄弟生家跡」「子規堂」等)、道後温泉、三津浜港などの「サブセンターゾーン」、およびそれらを結ぶ回廊型動線から成る。

松山市は既存の施設だけを「フィールドミュージアム」の構成要素と考えるのではなく、市民の新しい活動を創出することも重要な構成要素であると考えている。そのため「フィールドミュージアム活動支援事業」を設け、市民団体の活動を支援している(2007年度は反戦思想家再現など8つの活動が対象)。

松山市は、「フィールドミュージアム」を通



「秋山兄弟生誕地」とループバスのりば  
2006年2月撮影(以下同じ)



「子規堂」

して『坂の上の雲』の主人公3人が持つ姿勢・精神が人々に広がり、次の諸要素でまちづくりが進むことを期待している。

理想を追求する姿勢としての「若さ」「明るさ」

知識情報を「集め」「比較する」ことによる独自の価値観の創造

先例にとらわれず合理的に問題を解決していく「リアリズム」と「合理性」

生涯学び続ける姿勢と人とのつながりを大切にする「励む」「励ます」

まさに、組織の上からの決定や組織のしがらみにとらわれず、既存の価値観にとらわれず、自分で考え、自分の価値観で行動する個人を基礎とするまちづくりを志向していると言える。その個人の生き方は、例えば「秋山兄弟生家跡」に掲げられている秋山好古の次の生き方にもよく表れている。



『坂の上の雲』の主人公（中）秋山好古  
（左）秋山眞之（右）正岡子規

秋山好古は（中略）退役時元帥奏請の動きがあったが固く固辞した。退役直後、郷里松山の私立北豫中学校長を懇請されると直ちに快諾。勲一等陸軍大将の一私立中学校長就任は全国を驚倒せしめた。（中略）校長就任後は、亡父の残したこの旧屋から6年半、一切軍服を着ることなく騎馬で皆勤した。

「墓は大きなものを作ると子孫が迷惑する。軍人は立派な家を建ててはいかん。銅像などいらん」

2007年4月には「坂の上の雲ミュージアム」が「フィールドミュージアム」の中核施設として開館した。安藤忠雄氏の設計になるもので、「人物・志・歴史を学ぶ「展示施設」」、「まちづくりを支援する場」、「フィールドミュージアムの情報発信の拠点」の3つの機能を持っている。



建設中の「坂の上の雲ミュージアム」

### - 3 - 3 美しいまち 長野県小布施町

小布施のまちは美しい。そのまちをつくっているのは人々の開かれた心であり、それを象徴するのがオープンガーデンである。

との思いで長野電鉄小布施駅(長野駅から20分)を降りると、まずは駅舎と同じ屋根の下にある「六斎舎」で「おぶせオープンガーデンブック」という綺麗なカラー刷り約80ページの冊子(庭園数は76もある)を買い求める。200円という廉価であるが、最後の3ページに地元8団体の広告掲載があるので、これらの団体が相当額を負担しているものと思われる。

「六斎舎」は第3セクターのまちづくり会社「ア・ラ・小布施」(1994年設立)が2003年に空き店舗に開いたコミュニティ施設である。観光案内所であり地元の人々がイベント等で集う場でもある。内部には喫茶スペースがあるほか、「小布施丸ナス」など地元特産品の販売コーナーもある。この施設の運営経費も地元団体の負担でかなりの部分が賄われているようである。

駅前にはポケットパークが整備されている

が、そこに植えられている花は住民が自発的に持ち寄ったものであるという。駅前の道を南西方向に下り、栗ガ丘小学校の横の桜のトンネルを通り、谷脇街道に出て谷街道と交差する中町交差点に至ると、そこが小布施町の中心である。その北東角には大変美しい和風のオープンガーデンがあり、家の前の歩道も綺麗な花で飾られている。

そこから谷街道を北へ向かうと「おぶせガイドセンター」(「ア・ラ・小布施」運営の案内所・休憩所)があるが、南へ下ると、そこが町内随一の観光スポットである北斎館(1976年開館)高井鴻山記念館(1983年開館)緑の多い広場などがある一角となる。谷街道の歩道は栗材で舗装され、北斎館と記念館とを結ぶ裏の小径も栗の舗装となっている。この気持ちのいい空間が地権者の協調による換地等で形成されたことはよく知られている(この点に関しては国土交通省の「まち再生事例データベース」を参照されたい)。

栗の小径を辿って高井鴻山記念館の裏を北



駅舎と一体になっている六斎社  
2007年7月撮影(以下同じ)



「栗の小径」



上し、その先のオープンガーデンや美しい風景を眺めつつ、向きを東方に変えて歩き続けると間もなく（夏であれば）プラムやぶどうなどが実る広大な畑の間の道となり、やがて「6次産業センター」に至る。ここは「財団法人小布施町振興公社」が運営する施設である。農産者自らが加工、販売まで手がけることでまちの経済循環を高めることを目的とし、「小布施ブランド」（「小布施屋」という公社のブランド名を冠した「りんご酢」など）の開発を行っている。地元の様々な農産物、菓子等も販売しており、周辺住民には買い物に大変便利な場所でもある。また、「6次産業センター」の向かいには「フローラルガーデンおぶせ」がある（広大な庭園と温室を有する鑑賞施設、様々な植物の販売施設）。

コンパクトで緩やかな風景を持つ小布施は、人のつながりも緩やかに保たれているようである。例えば、子供たちは誰にでも挨拶をし、その子供たちのために商工会青年部は毎年夏になると連日深夜に及ぶ作業でイベントの準備

をする（2007年は本格的な忍者屋敷を建築した）。このような小布施の誇るものを、フリーライターの畔上柊子氏は『栗の詩』第27号（ひいらぎ書房）に「その一、豊かな自然と風土（山と川に囲まれたまち）、その二、進取の気性に富み、開放的な気質を持つ小布施びと」と記している。

一方、同30号で同氏は「教育、少子化、高齢化に伴う荒廃農地の増加」などの問題も指摘している。実際、小布施町の統計集を見てみれば、「幼稚園入園者数」平成元年154人 同18年100人、「りんごの栽培面積」平成2年418ha 同17年250ha、「長野電鉄小布施駅乗降客数（日平均）」平成元年度1,704人 同17年度1,497人と変化している。一方、2004年度に行われた調査によれば、自動車交通量が多いという問題が指摘されている。これらの諸問題に対し小布施町がどのような方向で取り組み、どのような新しい調和を模索するのか、大変美しいまちであるだけに、特段注目されるところである。



「おぶせミュージアム」近くの風景



小布施町6次産業センター